



Varying length of central myelin along the trigeminal nerve might contribute to trigeminal neuralgia

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2019-06-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野村, 契 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/00003562

論文審査の結果の要旨

三叉神経痛は支配領域に起こる短時間の激しい電撃痛を主症状とし、周辺血管による神経への圧迫が原因とされる。三叉神経の脳幹に最も近い部位が圧迫されていることが多く、中枢性ミエリン（*oligodendroglia* 由来）との関連が言われてきた。しかし遠位部の血管圧迫でも症状を示すこともあり、中枢性ミエリンか末梢性ミエリン（*Schwann cell* 由来）のどちらが関与しているか結論がでない。そこで申請者は、三叉神経痛の発症機序を明らかにするために健常検体の三叉神経で中枢性および末梢性ミエリンの組織構造を検討した。

ヘルシンキ宣言に基づき同意書を得られた 67 解剖献体から 134 本の三叉神経を橋の一部を付けて摘出し、パラフィン固定後に連続切片を作製した。ルクソールファストブルー染色をし、最中心部の切片で、中枢性ミエリンの広がり **Obersteiner-Redlich zone**（円錐状をした中枢性ミエリンと末梢性ミエリンの移行部）の長さを測定した。すべての計測が可能であった 29 本について解析した。中枢性ミエリンの長さは、三叉神経外側で平均 3.56 mm (0.69~8.66 mm)、内側で平均 1.81 mm (0.36~5.00 mm) であった。また、中枢性ミエリンが外側で 6.0 mm 以上のものが 3 例、内側で 5.0 mm 以上のものが 1 例あった。移行部の長さは平均 1.75 mm (0.31~3.37 mm) であった。これらは、従来の報告よりも中枢性ミエリンが遠位まで広がっていることを示していた。末梢性ミエリンとされていた部位が、実際はより遠位まで伸びた中枢性ミエリンであり、その圧迫で三叉神経痛が生じる可能性が明らかになった。

審査委員会では、解剖献体を用いて脳幹から三叉神経のミエリンの状態を実際に計測し、手術所見ではわからなかった三叉神経痛の原因を明らかにした点を高く評価した。以上により、本論文は博士（医学）の学位の授与にふさわしいと審査委員一致で評価した。

論文審査担当者

主査 峯田 周幸

副査 宮嶋 裕明

副査 増本 一真